

居場所論：子ども篇（その二）

～聞き書きをもとにして～

天 沼 香

はじめに

本稿は、前稿「居場所論：子ども篇（その一）～前近代における『子ども』という存在の歴史的位相～」(『東海学院大学紀要』第3号、2009)の続編として位置づけられるものである。

ただし、仮に(その二)とは銘打ってあるものの、実際的には、本稿は(その三)あるいは、(その四)となるべき稿である。前稿と本稿との間には、(近代における「子ども」という存在の歴史的位相)ならびに(現代社会における「子ども」という存在の位相)といった論考が挟み込まれる予定だからだ。

前稿に直接、続くべき、それらの歴史的、理論的検討が偶々、後ろ回しになり、子どもにとっての居場所、子どもの眼から見た大人たちの居場所、かつて子どもだった大人たちの回想する居場所等に関する聞き書きが先行したので、本稿ではその一部分に関して「ものがたり」的に触れることとする次第である。

本稿では、聞き書きの際に、インフォマントから得られた言葉をなるべくそのまま本文中に織り込むようにするとともに、ストーリー性をもって話が展開するように心がけた。

なお、本稿に登場する人物の名前は、本人たちの希望により具体的な人物が同定できないよう、すべて仮称とした。地名等も一部は仮称とさせていただいた。

私の聞き書きインタビューに協力を惜しまれず、その個々の居場所等々に関する見解を開陳していただき、さらには、それを文章化し、公にすることを許された、インフォマントになってくださった多くの子どもたち、大人たち、その両者の中間に位置する人たちに対して、深甚の感謝の念をささげたい。

1. 居場所探しの旅

人は、誰もみんな、それぞれに生きていくなかで、その時、その時における自分の居場所を探し求めているんだよね。

人は、誰もみんな、それぞれに生きていくなかで、この世に生まれてきたものに永遠の命などはあり得ず、全ては有限で、ものごとには必ず終わりがあることに、徐々に気付いていくんだね。

だから、きっと人は、誰もみんな、その寂寥感や無常観を少しでも和らげるために、何かを探し求めて生きていくんだね。

その探し求める何かのうちのひとつが多分、心休まる居場所なんだろうね。

自分が、ゆ～ったりゆ～ったりフ～ンワリと無理なくありのままの自分で居られる場所。

自分が愛されているってことを、時にピーンと、時にホワ～ンと感じられる場所。

自分が必要とされていることを、時にヒシヒシと、時になんともなく実感できる場所。

自分の力を思う存分に発揮できる場所。

気の置けない友だちと、心置きなく語り合える場所。

みんな、それぞれに、あれこれ、心地よい居場所を探し求めて生きているんだね。

そんなふうにと考えると、人生って、居場所探しの旅って言えるかもしれないね。

それは、人によっては、徳川家康(の家臣、本多正信)が言ったように「重き荷を背負うて長き道りを行く」ような、重くて果てしない旅路かもしれないし、人によっては、弥次さん喜多さんの「東海道中膝栗毛」みたいに案外、お気軽な道中かもしれないね。

2. 至福の居場所としての胎内

人は、誰もみんな、それぞれのお母さんの胎内から生まれてくるんだよね。

そのお母さんの子宮のなかこそ、それぞれの人にとってが一番、心地よい居場所なんだ。

どう考えたって、これ以上の居場所はないでしょ。

だってさ、そこは、安全この上ない場所でしょ。

そこでは、安心して生きていられますでしょ。

そこでは、あくせく自分の力で食べていけなくなってきたって、ちゃ〜んと栄養も補給してもらえますでしょ。

そこでは、ひがな一日、ゆ〜っくり、ゆ〜ったり、フ〜ンワリ、なにひとつ悩むことなく、悠々と過ごせるでしょ。

そこでは、お母さんの無限の愛情に抱擁されてるでしょ。

こんな完璧なまでに素敵な居場所は、どんなに一所懸命になって探しても、他には探し出せっこないでしょう。

フ〜ンワリ、クブクブ、ユラユラ、プカプカ、ゆ〜っくりユラユラ、ゆ〜ったりプカプカ、モゴモゴ、ゆ〜ったりモゾモゾ、クルクル、クル〜ン、フ〜ンワリ、ユラユラ、クブクブ・・・お母さんの子宮のなか。

お母さんの胎内に居るときが、個々の人間にとって人生の至福の時だと思うよ。

その時には、それは自覚できないけどね。

まだ、そこに居る時期は、人生って言いにくい段階かもしれないけどね。

この世での人生が始まる前に、人はそれぞれに等しく、それぞれのお母さんの胎内で、フ〜ンワリ、ゆ〜ったりユラユラ、クブクブな、とってもハッピーな居場所を体験しちゃってるんだなあ。

そんな、お母さんと一体の安らかな、安心してきた状態に別れを告げて、人はみんな、この世に生まれ出てるんだね。

だから、人間は、有島武郎さんじゃないけど、いきなり「生まれ出づる悩み」、寂しさ、苦しみ、悲しみをかかえて生まれてくるっていうふうに見えるのかも知れないね。

それで、赤ちゃんはみんな、ヘギャアヘギャアヘギャアヘギャアヤダアヤダアって、泣きながらお母さんの膣口から顔を出すんだなあ。

「ヤダア、ヤダア、ヤダヤダア〜、まだまだもっともっとお母さんの子宮の中に居たいよ〜。ヘギャヘギャ〜、まだ出たくないよ〜。ヘギャヘギャ〜、もうちょつと胎内に居させてほしいよ〜」

って泣いて訴えてるんだね。

そして、へその緒を切られるってことは、いよいよお母さんとの肉体的なきずなを遮断されること。

赤ちゃんとして、現世に「生まれ出づる」瞬間の、このとてつもなく大きな分離体験、別れの経験は、それぞれの人にとって、別離の悲しみの原体験核になってるんだって言えるかもしれないよ。

至福の時から一転、奈落の底に突き落とされたようなものだものね。

だから、母親の胎内っていう最高にハッピーな居場所を追われた人びとは、この世に生れ落ちた直後から、四苦八苦のなかで、自分の次善の居場所を捜し求める旅を始めるんだ。

赤ちゃんが、柔らかいお母さんに抱っこされたくて、張り切った豊かな乳房に吸い付きたくて、おいしいおちちを求めて、

「ヘギャアヘギャア、フンギャアフンギャア、ヘギャヘギャ〜、フゴフゴ、ヘギャ〜。おちち飲みたいよ〜」

って泣きわめくのは、赤ちゃんなりの、お母さんの胎内に代わる居場所探しの努力なんだね。

赤ちゃんのおっぱい探しは、それぞれの人の、この世に生れて初めての居場所探しの旅って言えるかもしれないね。

3. もう一度、居場所って？

居場所って、そこに居ると、なんだか心が和らいで、とっても落ち着ける場所。

居場所って、そこでは自分が必要とされてるって思える場所。

居場所って、そこでは絶対的に無条件に自分が愛されているって感じられる場所。

居場所って、そこに居る人たちとカンカンガクガクケンケンゴウゴウワイワイガヤガヤ語り合え、心底から笑い合える場所。

居場所って、自分のレーゾン・デートル（存在理由）が、きっちり確認できる場所。

なんととっても、居場所って、そこに居ると、そこはかたなくハッピーな気持ちになれる場所。

そんな居場所って、やっぱり生きていくうえで必要なんだよね。

そういう居場所がほしいよね。

五木寛之さんみたいな、時代の寵児と言ってもいいような、とてつもなく生きる力のある人気作家は、居場所なんてちっちゃな幸せのある場所は不必要って言い切れ

るかもしれないけどね。

でも、そんなに強くない、・・・
 そんなにお金持ちでもない、・・・
 そんなに社会的地位があるわけでもない、・・・
 そんなに才能に恵まれているわけでもない、・・・
 そんなに自信满满でもない、・・・
 でも一所懸命に、・・・
 でも頑張り過ぎることなく、・・・
 日々を堅実に生きてる・・・
 善良な人びとのささやかな人生には、
 きっと、
 信頼できる人たちが居る場所、
 愛し合える人たちが居る場所、
 語り合える人たちが居る場所、
 ホッとくつろげる場所、
 自分の原点に立ち帰れる場所、
 自分を温かく迎え入れてくれる場所、
 ・・・

そんなこんな、いろんな居場所が必要なんだよね。

そんなこんな、いろんな居場所を持てたらハッピーだろうなあ。

4. 香織ちゃんのいちばんの居場所

香織には、いっぱい居場所があるのよ。

まずは、わたしのとっても楽しいおうち。

そのおうちのなかでもね、香織のいちばん好きな居場所、知ってる？

な～んて言っても、わからないよね。

教えてあげるね。

後からね。

わたしのうちには、ちょっとこわいときもあるけど、ほんとはやさしくて、それに、とっても力持ちのお母さんがいるのよ。

お母さんがいちばん好きなことは、なんだか知ってる？

な～んて言ってもわからないよね。

教えてあげようか！

食べることなのよ。

とにかく、よく食べるの。

うちの犬のチュルピーちゃんは、ゴールデン・レトリバーでわりと大人しくって上品な雰囲気漂わせているんだけど、体つきが大きい分、食べることにどん欲で困

ちゃうくらいカシカシカシカシカよく食べる。

うちのネコのクリちゃんは、アメリカン・ショートヘアで、ちょっぴり気どり屋さんなんだけど、やせてるわりに「痩せのなんとか」でお皿に顔をこすりつけて、これまたシカペロシカペロよく食べるの。

でも、さしものチュルピーちゃんもクリちゃんも、食べっぷりでは、うちのお母さんにはぜんぜんかなわないのよ。

朝ごはんや夕ごはんのおかずなんか、香織や勇兄ちゃんが残した分は、お母さんとチュルピーちゃんとクリちゃんとで取り合いになって、一人と二匹で見事に残りをぜ～んぶ平らげてしまうの。

おやつのお菓子だって、おまんじゅうでも、ケーキでも、シュークリームでも、おせんべいでも、おかきでも、かきピーでも、アイスクリームでも、チョコレートでも、ねじりんぼうでも、なんでも、大吉の4倍、香織の3倍、勇兄ちゃんの2倍くらい食べちゃうの。

だから、うちのお母さんは、体ぜんたいが、柔らかくて、ふっくらぼちちりしてるのよ。

香織のお母さんって、プックリた～っぷりあんこのはいった大福もちみたいなのよ。

わたしのお母さんって、フワ～んふわりんとした真っ白いマシュマロみたいなの。

お母さんのおなかは、プックリプックリフワ～んフワ～んフワフワ。

脚もね、とっても白くって、わりとカッコいいんだけど、ちょっぴり太めでふっくらしてるの。

あの、よくエステ関係の広告なんか載ってる「使用前」→「使用後」「施術前」→「施術後」の写真で言うと、典型的な「使用前」「施術前」の方の写真の体型なのよ！！

だからね！

プックリフワ～んと低いソファに座ってるお母さんの体のなかに、すっぽりはいっちゃうと、香織、すごく気持ちがいいんだ！

分かったでしょ。

おうちの中でも、お母さんのおなかのうえが、香織のいちばんの居場所なのよ～！

ふ～んわりやわらかくて、とっても気持ちいいんだも～ん。

お母さんのおなかのうえにいたら、ゆった～りした気持ちになれて、いやなことなんか、ぜ～んぶ忘れられちゃうの。

もう夢見心地！

香織ね、お母さんのおなかのうえに居ると、い～っぱい楽しいことを考えられるのよ。

いろんなことに挑戦してみようかな～っていう気持ちにもなれる。

勇気だってリンリンフツフツ湧いてくるんだも～ん。

5. 海と家族が居場所のお父さん

そのお母さんの居るおうち、もちろん香織の大事な居場所。

だから、お母さんは香織の居場所中の居場所なのよ。

他におうちのなかでは、わたしと大吉の相部屋の子供部屋とか、お父さんのお位牌のある居間は香織の大好きな居場所。

大吉は、二つ違いの弟で甘えん坊のくせに威張りん坊。でも、かわいいの。

わたしと一緒に、おしゃべりが大好き。

だから、夜、寝る前なんかには、ベチャベチャお話しするのがけっこう楽しいのよ。

遅くまで、キャッキョ言いながらしゃべってて、お母さんに、

「香織～！大吉～！二人とも、もういいかげんに寝なさいよ！！勇ちゃんだって、もうちゃ～んと寝てるんですからね」

って、よく叱られちゃう。

勇兄ちゃんは、なんてたって優等生タイプで、やることなすことキチンとしてるの。

礼儀正しいし、勉強も出来るし、早寝早起きだし、香織とは大違い！

勇兄ちゃんみたいに早寝が良いことは分かってるから、わたしと大吉は、二人揃って大声で、

「は～い。寝ま～す。お休みなさ～い」

って、返事だけいい返事をして、急いで明かりを消すの。後は二人とも声を少しちっちゃくして、お話の続きをするのよ。

二段ベッドで、大吉が上の段に寝てるから、天から声が降ってくるみたいなの。

香織がそう言ったら、大吉ったら、

「そうだよ！ボクって、かわいい天使みたいな子だから、香織姉ちゃんには、天から声が降ってくるみたいに見えるんだよ」

だって。わたしより二つもちっちゃいのにお口はとっても達者なの。

居間で、寝転がって、仏壇の上で笑ってるお父さんの写真を見てると、忙しかったお父さんが、お盆の休みに茅ヶ崎の海に連れてってくださったことを思い出すのよ。

透明な薄い青の空から黄色と赤と金色が混ぜ合わさった太陽が、海に落ちてきて海がキラキラギラギラピカピカ光ってたわ。

楽しかったなあ。

香織のお父さんは、

「こうはみえても高校の頃はかなり有望な水泳の選手だったんだぞ」

って、ちょっぴり自慢してたっけ。

でも自慢するだけあって、泳ぎ方はほんとうに上手で、我が父ながら、ほれぼれするほどカッコよかったなあ。

わたしと大吉を浜辺においといて、お父さんは沖のえぼし岩まで、スワ～ッと泳いで行っちゃって、間もなくスイスイ海岸に戻ってきて、まるっきり平気な顔してた。家族みんなで潮風に吹かれてハッピーだったなあ。

お父さんは、サラリーマンだったけど、あまり会社が居場所っていうふうには思ってたみたい。

でも、お父さんの同僚の人たちのなかには、「会社＝我が命」って思ってる感じの人もいたって。

そういう人たちは、会社こそが自分の第一の居場所っていうふうには思ってたみたい。

実際、一日の大半を会社で過ごす人たちって多いよね。

会社のオーナーでもないのに、「我が社」とか言っちゃってる課長さんとか、係長さんとか、主任さんとか、平社員の人たちは、やはりどこかで自分を会社という存在に同一化させてるようなところが見受けられるって、お父さんは言ってたなあ。

「道元じゃないが『他は己ならず』。人は人だから、会社が我が居場所って感じの意識を持ってる人を批判はしないが、そういう認識はぼくには全くなじめないなあ。会社はあくまでゲゼルシャフトだからな」

って、お父さんは常々言ってた。そのあとに続けて、

「お母さんとお前たち三人と、広い海こそがぼくの居

場所だ」

とか言ってたわ。

ちょっとカッコつけちゃってって感じもしなくはなかったけど、なんかうれしかった。

海が大好きで家族思いだったお父さんらしい本音の言葉だったような気がするわ。

香織にとって、お父さんは、お母さんにはちょっとだけ負けてたかもしれないけど、やっぱり負けず劣らず素敵な居場所だったなあ。

お父さんのおひざはコツコツ骨っぽいし、お腹も筋肉質で硬くて、お母さんのおなかのうえみたいにフ〜ンワリやわらかくはなかったけどね。

今では、もう抱っこはしてもらえない。

だけど、あの世に行っちゃった後も、お父さんは大事な大事なわたしの居場所なのよ。

だから、死んじゃったお父さんの居場所も、冷たいお墓の中なんかじゃなくて、お母さんと勇兄ちゃんと香織と大吉の心の中と広大な海なんだ。

この他にも、香織の居場所はね、近所のさっちゃんちとか、みっちゃんちとか、さくら鉄道のすずめ山駅からおうちに帰る途中にあるすすく公園とか、いっぱいあるんだも〜ん。

6. オレンジ・キッチン

香織んちの前のプラタナス並木の道を南に向かって、80メートル行ったところにある三さ路を西南方向に折れて、いちよう並木の道を100メートルくらい進んだところの信号のある交差点をそのまま200メートルほどまっすぐ歩いていくと、さくら鉄道のひまわりが丘駅が見えてくるの。

ひまわりが丘駅のお2階は、オレンジ・キッチンっていう食堂になっていて、お昼時を中心にけっこういつも賑わっているのよ。

ここで、香織のお母さんは働いているの。

うちのお母さんは寝ることよりも食べるのが大好き！！

それこそ、「好きこそもの上手なれ」って言うことわざの通りで、お母さんは、けっこうおいしいビーフシチューや、カレーライスや、たらこスパゲッティや、ハンバーグや、クリーム・コロッケや、海老フライやなんかを作るのが上手なの。

だから趣味と実益を兼ねて、お母さんは、このオレンジ・キッチンでニコニコ働いているのよ。

ほんとうに楽しそう！

オレンジ・キッチンは、お母さんの午前中から夕方にかけての、とっても居心地のいい居場所なんだって。

お母さんにとっては、自分が必要とされているってことをヒシヒシと実感できる場所だし、人間関係もすごくいいみたい。

おまけに、ちょっぴりこっそり「公然の秘密」でつまみ食いも出来るし、労働の対価としてそれなりに正当な賃金ももらえるし、一石二鳥を得られる格好の居場所なんだって言ってるわ。

従業員は5人だけ。

だから、5人みんなが一致協力して、フライを揚げたり、ごはんを炊いたり、カレーを煮込んだり、お客さんから注文を聞いたり、出来た料理を運んだり、テーブルの上をきれいにしたり、食器を洗ったり、床掃除をしたり、レジ打ちをしたり、最後の売上げの計算をしたり、・・・。

みんな、なんでもやるんだって。

みんなが、なんでもいろんなことをやろうっていうのは、香織のお母さんの提案なのよ！

ほんとのこと言うと、注文を取る人、料理を作る人、食器を洗う人、会計をする人っていうように、それぞれの仕事を分けたほうが能率は上がるし、収益率も高まって経済効率はいいらしいのよ。

でも、そうすると、人間らしさが欠けちゃうようなことになるといけないから、少し能率や収益は下がっても、みんながぜんぶに関わろうっていうのが、香織のお母さんの考えなんだって。

どうして、そのほうがいいかっていうと、もともと人間はものを作ったりするのに、きちんとその一から十までをこなしてきたのに、近代になって、資本主義の時代になり、効率よくものを作り上げるために、ひとりひとりの人間は機械化された工場で、作業の一部分だけを受け持たされるようになり、ぜんぶを一人の手で作ることができなくなってしまった結果、ひとりひとは機械の歯車みたいな存在になっちゃって、人間らしさを欠くような傾向が出てきたからなんだって。

それが、近代における人間疎外の状況だとか何とか、お母さんは小難しいこと言ってたけどね。

もちろん、複雑化した現代において、すべての職場で、誰もが一から十まですべての業務を行うなんてことは不可能なことは事実よね。

でも、オレンジ・キッチンの人たちは、香織のお母さ

んを始め、真由美おばちゃんも、貞子おばちゃんも、えりちゃんも、麗ちゃんも、みんな、てきとうに注文は取るし、料理は作るし、お皿洗いもするし、フロアの掃除もするし、とっても楽しそうに働いているの。

注文取ったり、料理を運んでいって、お客さんとちょこちょこ話したりするのも、みんな大好きみたい。

そうよね！

料理作るだけだったり、食器を洗うだけだったりの役割だと、お客さんとお話することなんか、できっこないもんね！

お客さんたちだって、自分がこれから食べるお料理を作る人のことを知ってるほうが安心するし、うれしいみたいだしね！

オレンジ・キッチンでは従業員とお客さんとが仲良く、まるで友達どうしみたいなの。

そんな職場だから、貞子おばちゃんも、真由美おばちゃんも、えりちゃんも、麗ちゃんも、みんな、お母さんと一緒に、ここは自分の屋間の快適な居場所って言ってるのよ。

お客さんでも、オレンジ・キッチンを自分の憩える居場所にひとつみたいと思ってきている人たちもけっこういるみたい。

「ここのカレーは、むっちゃんこ、うみゃ〜でいかなのだわ。おまけに、ボリュームたっぷりだだよ。その上、安いで言うことにゃあぎゃあ。おばさん！ボクが教えたるで、そのうち味噌カツもここのメニューに入れたってちょ」

名古屋からひまわりが丘に働きに来てる純ちゃんは、しょっちゅうオレンジ・キッチンにお昼御飯を食べにきては、ちょっと知的な雰囲気のエリちゃんや、笑顔がとってもかわいい麗ちゃんたちに、楽しそうに名古屋弁でたっぷり油を売ってくるのよ。

純ちゃんは、いつの日か、ほんとうに味噌カツをオレンジ・キッチンのメニューに加えてもらおうつもりをしているみたい！

純ちゃんは、海老フライを食べたいときも、

「おばちゃ〜ん、今日は海老フライ作ったってちょ」

なんて、大声で名古屋弁で注文するものだから、もうみんな名古屋弁が気に入っちゃって、

「はいよ〜、海老フライね！ちょっと待っといたっ

てちょ！」

とか何とか、香織のお母さんも真似っこしたりして、名古屋弁が大流行（おおはやり）！

いいよね！方言って、なんか、温かくって。

人と人との距離を縮めるよね。

事務的に冷たく語っているような、建前をしゃべってような感じが否めない共通語。

それに対して、人間的な触れ合いがあり、なんとなく無理なく本音でしゃべれるような感じがする方言。

あらゆる局面で人間関係が稀薄化している今日において、もしかしたら、方言は温かい人間関係を再構築する救世主になるかもしれないね。

お互いに、心おきなく方言でしゃべれる場って、心地よい居場所かもしれないよね。

そんな考えが相まって、オレンジ・キッチンでは、名古屋弁を始めとして、いろんな地方の方言が飛び交うの。とってもいい雰囲気になるのよ。

茶目っ気のある麗ちゃんなんて、純ちゃんに、

「純ちゃん、名古屋城の天守閣の屋根にのっかっとなるのは海老フライかね？名古屋嬢かね？それとも金のシャチホコかね？どれだか知っとなる？」

なあんて、しょ〜もない質問するの。

すると純ちゃんも、

「麗ちゃん！あんた、そんなことも知らんの？！そんなもん、名古屋嬢は海老フライに決まっとなるがや！名古屋嬢は海老フライと味噌カツが大好きなんだぎゃあ！」

なあんて、とぼけた答をする。

すると麗ちゃんも負けずに、

「純ちゃん！あんた、何言っとなるの！そりゃあ、名古屋「じょう」違いだがね。名古屋嬢やにゃあよ。名古屋城だがね！」

って、本場の純ちゃん顔負けの名古屋弁で応じる。

そんな掛け合い漫才みたいな感じで、二人で笑いを振りまいてるのよ。

これには、けっこうまじめな真由美おばちゃんも、微笑。

中高な端正な顔をほころばせながら、

「純ちゃん！油ばっかり売っとらんと、はよ食べて、会社に戻りゃあ！仕事さばってばっかおると辞めさせられてまうに！麗ちゃんも油ばっか売ってんと、はよ皿を洗ってちょよ！」

な～んて、案外うみやあ名古屋弁で言わっせるんだわ。なごや弁の効果か、もうすっかり、なごやかな空気がオレンジ・キッチンに流れるんだわ。

そんな雰囲気だで、純ちゃんも、ここは居心地がいいみてやあで、

「ここは、どのメニューもうみや～し、みんな感じええ人ばっかだし、ボクのランチタイムの居場所はこしかにゃあぎゃあ～！」

な～んて言ってくれるの。

また、それに乗っちゃって香織のお母さんが、

「なにうみや～こと言っとらせるの！そんな冗談みてや～なお世辞言うても値段はまからせんよ！」

って、ちょっぴり怪しげにして当意即妙な名古屋弁で応じるの。

すると、純ちゃんは即、答を返してくるのよ。

「お世辞やにゃあよ！ボクはお上手とかは、からっきし言えせん人間だで、ホントのこと言っとるんだがや。オレンジ・キッチンのメニューは全部、食べたけど、どれもこれも口がとろけそうになるくりゃあ、うみやあて！しかも、みんな、ホントに気持ちいい、ええ人たちだで、来ると気分良うなるんだぎゃあ～」

香織のお母さんも真由美おばちゃんも貞子おばちゃんも、そんな純ちゃんの言葉にク～ラクラ、瞳がハート型になって大喜び。

純ちゃんには、ライスをひいき目に盛ってあげたり、カレーにジャガイモと肉を少し多めに入れてあげたりしているみたい！

おやじギャグで、

「オレンジ・キッチンは、おれんちみたいに、キッチンくつろげる居場所だぜ」

な～んて言ってくれる根っから地元育ちの植木屋さんの修太郎おじさんも常連客のひとりなのよ。

関西から、こっちに働きにきてる元ちゃんは、

「このもんは、わりかし美味いで！どのメニューもけっこうイケるで！大阪暮らしをしとった美食家のわしが言うくらいやし、ここのカレーやら海老フライやらのレベルの高さはホンモノや！」

なあんて、自分をほめながら、オレンジ・キッチンのことをほめてくれるのよ。

そういう言葉って、香織のお母さんや真由美おばちゃんや貞子おばちゃんや麗ちゃんやえりちゃんたちにとって、胸がキュンとしちゃうくらい、すご～くうれしい褒め言葉なんだって。

元ちゃんの、そういう関西弁でのほめ言葉に対しては、真由美おばちゃんや貞子おばちゃんがさりげなく、

「おおきに！ありがとうさんどす！そないに言うてもろて！うちら、ほんまにうれしおますえ！」

てな調子のひまわりが丘的関西弁で返答。

こんな具合で、各地の方言みたいなののがごちゃまぜに飛び交って、お客さんたちと従業員がとっても仲良いのが、オレンジ・キッチン。

だから、オレンジ・キッチンには「人間疎外」なんていう近代社会の所産はないみたい。

だって、みんな、いつも明るいハッピーな笑顔なんだも～ん。

7. 居場所としての故郷

僕は、京都生まれの京都育ちなんや。

生まれたのんは、上京の寺町今出川を上がって、三筋目を西に入って、一筋目を上がったとこ。

フーテンの寅さんは、葛飾柴又の帝釈天で産湯に浸からはったことを自慢したはるやろ。

その気持ち、ものすご良う分かるわ。

何でか言うたら、僕かて、下賀茂神社の湧水の産湯に浸かったのんが、ちょっぴり自慢やしな。

僕んとこのうちは、御所と冷泉家と同志社大学と相国寺と本満寺と糺の森と下賀茂神社に囲まれたところに

あったんや。

なんや、ものすごええとこやったわ。

うちを出て、枳形通りを抜けて河原町通りを通り越したら、すぐに鴨川が流れてんねん。

河原町今出川をちょっと上がって一筋目の出町広場を東に入るとすぐにある出町橋のそこあたりが、ちょうど加茂川と高野川とが合流して鴨川になるとこやんか。

その辺り一帯の川べりは公園になってるし、僕んとこのうちの近くには、そこいらじゅうに僕の居場所があったんや。

今はな、お父さんの仕事の関係で引っ越して、関東に住んでんにゃけど、どうしたかて京都は忘れられへんわ。僕だけちごて、お父さんも、なにかっていうと、すぐ、

「そうだ、京都 行こう」

ってならはんねん。

信州の松本育ちのお母さんかて、なにかにつけて、電車やらのつり広告ちゃうけど、

「日本に京都があって良かった」

って言わはんねん。

二人揃って、仲良う古社寺巡りやらに行かはるわ。

なんでや知らんけど、妹の蘭華まで京都に行く前には、

「もういくつ寝ると京都に行くのかな。京都ではおばあちゃんとおばちゃんが嬉しそうに待っている。もうすぐ蘭華は京都に行くのよね～」

な～んて、替え歌まで作って口ずさんではしゃぐんや。京都に帰るのんが、楽しみで楽しみでしゃあないらしいわ。

そんで、京都に着くなり、

「京都はいいなあ、この京都」

「なんやしらん、やっぱり京都の空気はちゃう（違う）なあ、兄ちゃん！」

なあんて言いよんねん。

蘭華やら、ちっちゃい時分に京都を離れてしもてるのに、やっぱり京都に対する望郷の念はごつつうあるらしいわ。

蘭華は、まだ幼いし、居場所なんて言葉は知らへんや

ろし、使いよらへんけど、やっぱり京都を心の落ち着く自分の居場所って、思うてるみたいなんや。

京都には今でも、大事な大好きなおばあちゃんやらおばちゃんやらが住んだはるし、大谷石の崩れかかった塀に囲まれた和洋折衷の家もそのままやし、周りの景色かて、そんなには変わってへんねん。

ちょっとは変わってしもたけどな。

そやけど、東京みたいにボコボコ雨後の竹の子って感じで高層ビルなんかが立ち並んでって、街のかつての面影が全然のうなってしもてるようなとこと違うて、街のそここに昭和やら大正やら明治やら江戸時代やら、それ以前の時代の雰囲気が残ってんねん。

そないな京都が僕の故郷なんや。やっぱり今でも僕の居場所なんや。

ええやろ。

僕は故郷の京都が大好きやねん。

石川啄木はんが、

二日前に山の絵見しが

今朝になりて

にはかに恋しふるさとの山

やら

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

やら、

かにかくに浜民村は恋しかり

おもひでの山

おもひでの川

って詠まはった心境はよう分かんねん。

啄木はんは、心底、浜民村の光景が大好きで、北海道に居る時も東京に出て来てからも、しょっちゅう懐かしゅう「ふるさと」を思い出したはったんやなあ。

少年の頃、朝な夕な、その姿を飽くことなく眺めた姫神山と岩手山そして北上川は、啄木はんにとって終生忘れぬ「ふるさろ」の原風景やったんやろなあ。

僕かてそうなんや。

京都を遠く離れてても、僕にとっての「おもひでの山川」、大文字山と比叡山の山容そして鴨川の流れは、ふうっと脳裏に浮かんでくねん。

京都を離れて関東に移ってからいうもん、僕は京都に帰ってくると、まず必ず鴨川に架かってる出町橋の真ん中辺に行って欄干にもたれかかりながら、上（かみ）から下（しも）に流れる鴨川やら、近く遠く辺りをぐるう〜っと見渡すのが習慣みたいになってしもてるんやわ。

ちょっと告白すると、京極小学校の同級生やった出町のお肉屋さんちのじゅんこちゃんが、ある夏の日、下校の途中で突然、僕に、

「熊虎くん！あのな、出町橋から比叡山やら大文字山やら見とおみ！なんや、とつてもええ景色やし、見てみよし。今度、一緒に見よな」

って、言うてくれたことがあったんや。

おさなごころに、じゅんこちゃんは僕に淡い恋心を抱いてくれてるんかいなあって、自惚れたりしたもんやったわ。

それ以来、僕には出町橋から比叡山やら大文字山やらを眺める習慣ができてしもてん。

とうとう、じゅんこちゃんは誘えへんかったけどな。

かわいらしゅうて、甘えん坊で、そのくせ自立心旺盛なええ子やったなあ。

ちょっと惜しいことしたなあ。

そのまま、じゅんこちゃんと仲良うしてたら、将来、僕ら、お肉屋さんを継いで、大好きな豚肉も、牛肉も、ハムやらも、毎日、お腹いっぱい食べられてたかもしれへんかったなあ。

じゅんこちゃんも良かったけど、豚肉も良かったなあ。やっぱり、ちょっと惜しかったかなあ。

もつとも、じゅんこちゃんは、

「うちら、お肉は大きらいえ。毎日、毎日、牛やら豚やらの大きなお肉の塊ばかり見てとおみ。食べるのなんか、イヤになるえ」

って、言うてよつたし、八百屋さんになってたかもしれへんなあ。

おとつと、いつの間にか・・・、そやそや告白話から、ちょっと話が飛んでしもたし、元に戻すわな。

・・・

そいでな、北東に聳える比叡山やら、ほぼ東のごく近くに位置する大文字山やらを眺めると、心がほ〜

〜っと落ち着くんや。

ほんまに、「ふるさとの山に向かひて」言うことないねん。言うことなくなってしまうねん。

西行はんの、

何様がおはしますかは

知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

つちゅう心境とはちよつとちゃうねんけど、ふ〜〜と敬虔な気持ちみたいなもんに自分が包まれてくのんが分かるんや。

比叡山やら大文字山やらの靈性とか神秘性とか宗教性とかは置いとくとしても、眺めると、ある種、荘厳な気持ちつちゅうんかなあ、そんな気持ちを抱いてしまうんやわ。

ものすごええねん。

僕を包んでくれよんねん。

ものすご心が安らぐねん。

僕が僕らしゅうなれんねん。

ものすごハッピーな気持ちになんねん。

僕が僕で居られんねん。

僕は僕なりにな、これが啄木はんが言わはるところの「ふるさと」の山河の、そこはかとないありがたさちゅうもんとちゃうかいなあ思てるんや。

ふるさとの訛なつかし

停車場の人ごみの中に

そを聴きにゆく

やまひある獣のごとき

わがごころ

ふるさとのこと聞けばおとなし

ふるさとの

麦のかをりを懐かしむ

女の眉にこころひかれき

ふるさとの

村医の妻のつつましき櫛巻なども

なつかしきかな

・・・漂白流浪の歌人、青春歌人、多情な恋多き歌人、薄幸の歌人、啄木はんには故郷をいとおしむ歌が多いけど、その心はなんや僕にも分かるような気がするわ。

故郷をこよなく愛しながら、そこでの居場所を失ってしまった経験が余計に啄木はんの「ふるさと」への愛着の念を深めたんやね。

石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

僕やら、別に「石をもて追はるるごとく」して故郷を離れたんとはちゃうけど、せつないまでの望郷の念に関しては、啄木はんの気持ちがようよう分かる気がするわ。

居場所としてのふるさと、そしてそのふるさとのなかでの居場所をなくした啄木はんの哀切な気持ちを知ったことを通して、僕はますます「居場所としての故郷」、そして「故郷の中の居場所」の大切さを強く認識することになったんやなあ。

とともに、幼くして大好きだった京都を離れなければならなかったことも、僕が「居場所としての故郷」を大事に思うようになったひとつの大きな理由やと思うわ。

8. 居場所としての京都御所（その1）

その往時、京都五山の第二、相国寺の五重塔が聳えてたことにちなんで上塔の段町いう地名が付けられたって言われてる京都市上京区の一隅に、僕んとこのうちがあんねん。

僕の住んでた古い和洋折衷のうちはもちろんなんやけど、その近辺、寺町今出川辺りの一帯も、出町も、御所も、下賀茂神社も、相国寺も、本満寺も、枳形通り商店街も、鴨川公園もぜ～んぶ僕の居場所やったんやで。

相国寺の正門の辺りで缶けりしてるとな、どこからともなく、ひろおくんやら、ケンちゃんやら、きよしくんやら、のりおくんやら、ちゅんちゃんやら、とおるくんやら、わだくんやら、むらくんやら、しもぼうくんやら、ほったくんやら、たけむらくんやらが寄り集まって来んねん。

そしたら、みんなでさっそく向かいの今出川御門から

御所に入って、適当な木切れを探してチャンバラごっこを始めるんや。

御所は広大やし、自然林に近い森もあるし、芝生の広場もあるし、ごつつう幅の広いジャリジャリの砂利道もあるし、そこいら中を走り回ってチャンバラごっこしてみ。

めちゃくちゃおもろいし楽しいで。

蛤御門のうちそと辺りで、二手に分かれてチャンチャンバラバラチャンバラやってみいな。

なんや、気分はもう新撰組やで！

僕は、たまたま歴史好きで、当時のことをちょっとは知ってるし、みんなに新撰組隊士の名前やら長州藩士やらの名前を付けたんねん。

ちょっといかつい感じで剣道を習ってるケンちゃんには、

「おい、ケンちゃん、あんたは近藤勇やぞ。新撰組の局長やしな。ちゃんと指揮を執らなあかんで」

ケンちゃん、満足！

仲間うちでは、一番のイケメンで、ニコニコほっそりとカッコいいひろおくんには、

「ひろおくんは沖田総司や。新撰組一番隊長で、おまけに一番カッコええやつなんやぞ。剣の遣い手としても一、二を争う剣士やしな」

ひろおくん、満足！

いつも独特の存在感を示す、賢いしもぼうくんには、

「きみは、伊東甲子太郎じゃ。新撰組の参謀やしな。頭のええやつやし。後で、新撰組とは袂を別つことになるやつやねんけどな」

しもぼうくん、まあ満足！

大柄で豪快なところがあり、とても自己主張がはっきりしているたけむらくんには、

「たけむらは、なんといっても芹沢鴨やな。なかなかの豪傑でリーダーシップも執れるやつやねんけど酒癖が悪いのが玉に瑕なんや」

たけむらくん、ちょっぴり複雑な表情ながら、まあまあ満足！

たけむらくんにいつもひっついてるほったくんには、

「そうやな、きみはなんと言うても新見錦や。最初は近藤勇やら芹沢鴨やらと並んで新撰組局長やったやつやしな」

新見は後に、土方歳三によって切腹させられることなどは伏せておいたので、ほったくん、大いに満足！

どことなく反骨心があり、どこか寂しげなところのあるきよしくんには、

「よしっ、きよしは山南敬助や。新撰組総長やぞ。ええやつやねんけど、後には出奔して捕まって、沖田総司の介錯で切腹させられてしまうやけどな」

「ええやつ」が効いて、きよしくん、なんとか満足！
仲間うちで一番おっさん風ながら、その悠揚迫らないおっとりした性格のゆえにみなから慕われているのりおくんには、

「よっしゃあ、のりおくんは井上源三郎や。新撰組七番隊長で、みんなから好かれてた人やし」

のりおくん、おおいに満足！

こうして注釈付きでみんなに名前を上げて、満足させといて・・・

僕は、もちろん土方歳三。

ひろおくんやケンちゃんたちが聞きよんねん。

「おい、熊虎くん、その土方歳三て、どないなやつなんや？」

僕は、待ってましたとばかりに得意になって答える。

「土方っちゅうのんはなあ、武蔵国の多摩の百姓の家の出のやつなんや。生家の生業の関係で薬売りの行商やらもしてよってん。後には新撰組の副長や。クラスで言うたら局長が学級委員長で、副長は副委員長みたいなもんや。伶俐なやつやねんけど、ちょっと冷酷なところもあるやつや。最後まで薩長方と戦って北海道で討ち死にしようったんや」

「ふ～ん。そ～かあ」

って感じで新撰組一同納得。

そして、他の友達たちにも、長州藩関連の来島又兵衛、久坂玄瑞、桂小五郎、真木和泉、福原越後等々の名前を付けたってん。

そんでチャンバラごっこ開始やねん。

史実に反して、蛤御門の変が長州勢の大勝利だったりして、ほんまおもしろかったなあ。

こんな、おもしろすぎる御所が僕らの居場所やってん。

9. 居場所としての京都御所（その2）

夏になったらな、朝はようからうちの庭やら御所の森やらでクマゼミやらアブラゼミやらが、

「しゃあしゃあしゃあしゃあしゃあしゃあしゃあしゃあしゃあしゃあしゃあしゃあしゃあしゃあ・・・」

「じ～～～じ～～～じ～～～じ～～～じ～～～じ～～～じ～～～じ～～～じ～～～じ～～～じ～～～じ～～～」

じじっ、・・・じ～～～じ～～～・・・」

って元気いっぱい迫力満点で鳴き始めよんねん。

そやし、せつかくの夏休みでもおちおちゆっくり寝てられへん。

そやけど、そのセミたちのものすごい鳴き声が「ああ夏やなあ」って気持ちにさせてくれよんねん。

昼過ぎから夕暮れまで、御所とか下賀茂神社で、友達やらセミたちやらクロアゲハやらウラギンシジミやら玉虫やらトノサマバッタやらと遊びまくったんや。

休みの日にはお父ちゃんが、よう御所に昆虫採集に連れてってくれはったわ。

早速、バッタを捕まえて、お父ちゃんは、

「おい、熊虎！御所で捕れたバッタや！これを公家さまバッタっちゅうんやぞ」

って言わはるし、僕はそうかと思って、

「ふ～ん。これが公家さまバッタか！」

言うと、お父さんは、

「ちゅうちゅう！ジョーク、ジョークや。熊虎のア

ホ！！そんな名前のバツタはおらへんぞ！これは殿さまバツタ言うんや。よう覚えとけよ」

言わはんねん。

お父さん言うたら、もうこんな冗談ばっかしなんや。

僕にとって、うちから歩いて二分のところにある御所は、ひろおくんやらケンちゃんやらきよしくんやらとおるちゃんらと新撰組ごっただけと違ごて、かくれんぼした

り、鬼ごっこしたり、お父ちゃんと昆虫採集したり、お母ちゃんと妹の蘭華とお弁当もちでピクニックに行ったり、僕とこの庭みたいな楽しい居場所やったなあ。

そんなこんな思い出がいっぱい詰まってる御所は今でも僕の大事な居場所やねん。

10. 以下、枚数の関係上、別稿に回します。